
洋書紹介

Contemporary Influences in Early Childhood Education

by *Ellis D. Evans*

HOLT, RINEHART AND WINSTON, INC.

江波 諄 子

一九七一年に出版された、ごく最近の幼児教育に関する書物である。著者のエバンズはワシントン大学で教える若い学者である。序論だけは、イリノイ大学のラバテリ(Lavatelli)が書いているが、彼はそこで次のようなことを言う。

『一九六〇年代はまさに幼児教育の時代であった。それまでの、単なる遊びや芸術的活動によって、社会的、情緒的発達に重点をおいてきたプログラムから、系統だった堅いアプローチでこどもの認知発達を促そうと、教育心理学者の興味が移った。それに対抗するために発達学者は、自由遊びや芸術的活動も認知発達に役立つということを、論理的に説明しなくてはならなくなつた。この論争はまだ続きそうであるが、とにかく七〇年代には共に両極端の、行き過ぎた、時には異様なまでのプログラムは消えうせるにちがいない。教育心理学者は、こどもの遊びこそ学習なのだ、と認識するだろうし、発達学者は、認知発達を効果的に進めるには、ある程度の堅さも必要だと認めるだろう。願わくば、双方とも学習における情緒的、社会的要因を認めて欲しいものだし、きっとそうなるであろう。また、従来の幼稚園や小学校のように、単にワークブックを机にむかっしてしたり、先生中心の話すだけの勉強も修正されるだろう。だが残念なことに、私たちはまだ時々こんな言葉を耳にするのである。……でもこどもたちはそれがとっても好きなのです……』

それはいかにも、こどもは本能的に自分たちにとってよいことは好きで、悪いことはきらいだと知っているように聞こえるのではない。保育者こそが、さまざまな理論や研究がこどもにとって真によいものか評価できるのであって、彼らのみが、気まぐれな研究者からこどもたちを守ってあげられるのである。』
たしかに、こどもは生きている。こどもは動く。こどもは笑う。しかし、こどもが真の教育の中で生き、動き、笑っているのか、保育者は常にそれを見きわめ、またそれだけの力をもつように訓練されなければならない。

第一章では幼児教育の一般的なまとめとして、著者はコールバーグ (Kohlberg 1968) の言葉を引用している。『……認知行動の研究の根元的貢献は、こどもの初期の学業成績の違いは、就学後の学校の機構によるのではなく、就学前の経験と幼児期に形成された性格によるものである。……今後重要な論点は、複数のこどもにあった一連の画一された指導より、個々のこどもに最善と思われる個別指導に変わるだろう。』

なお、コールバーグは現在ハーバード大学の教授で、幼児期や成年期における道徳感の発達について、一種のピアジェのような理論をたてた人であり、人物的には非常に思慮深く、温かな研究者として知られている。

次に、二章以降各章で述べられている種々のプログラムのう

ちいくつかをひろい、その評価と問題点について要点を抜き出してみよう。

第二章は、モンテソリーメソッドについてである。

『初期のモーガンやキルパトリックによる過酷な非難後五〇年たち、幼児教育における認知経験、そしてそれに伴う環境の重要性が研究者の間で問題になると、モンテソリーはふたたび可能性をもって見直されるようになるのである。その大きな役割を果たしたのがハント (Hunt 1964) である。ハントは、つり合いの問題 (Problem of the match)』という言葉によって、こどもが新しい環境で意欲的に学習するには、与えられた場面の困難さと、それにむかうこどもの能力の程よいつり合いによると説明した。つまり両者のギャップがあまり大きければこどもは恐れをもって失望するし、ギャップがなければおもしろさからくる意欲もなくなるだろう。このことは認知発達的基础であるし、モンテソリーのいう学習における自発的意欲と興味の根本的な考え方なのである。ところが、教材については、七〇年前にイタリアの貧しい遅れたこどもたちのためにつくられたもので、現在のアメリカのこどもにも適当であるか、その使用についてハントは警告している。結局ハントは、モンテソリーメソッドは、こどもの自主的な発見する力を育てるのに欠けるとして、今日の幼児教育の問題を解決するすべにはなり得ない

と結論した……

ピアジェの理論の再生とともに、エルカインド(Elkind 1966)はモンテソリーとピアジェの分析を行ない、その共通点をして次の三つをあげた。

- ① 精神発達の能力は、生れつきのものと後に養われるものの二つの交流でまゐる。
- ② その能力は、学習を決定する。
- ③ こどもの反復行動は、しばしば新しい認知能力が現われるサインとなる。

以上の他、多くの批評がモンテソリーについて出されたが、そのほとんどは主観的な意見の形をとっている。いずれにも共通する非難点は、モンテソリーメソッドでは社会性の発達と言語発達が軽視されているということであるが、今後もっと具体的な個々の質問について(たとえば、モンテソリーメソッドは、学校へはいってから真にこどもの能力をのばすかとか、モンテソリーメソッドから普通の学校へ移った場合におこる、こどもの変化について等)より深い研究がなされてよい」と著者はいう。

「しかし過去の論争にもかかわらず、現実には非常な勢いで、モンテソリー学校が急増した。今や過去のモンテソリーについての論争は少なくなっているようだが、今後もし残り続ける産物は

次の四点だろう。① こども中心の方法。② 自由に基づいた学習形体。③ その自由を生かすための一定のわく組み。④ 責任感のある自由を身につけるために必要な道徳感。これらは教育にたずさわる人が、常に考慮しなければならない点である」とつけ加えている。

さて、第六章はピアジェ理論の幼児教育における影響についてである。

「ピアジェの発生的アプローチは現代の心理学に最も影響を与えた理論のひとつであり、彼の観点は心理過程とその産物とを明らかにする最も顕著なものである」著者はピアジェの認知発達のみならず道徳感についても、彼の児童発達における広い貢献をたたえると同時に、十分に検討されなければならない理論の細かい点に触れている。

「教育者にとってはいかにピアジェの理論を現場で応用するかが最大の興味であるが、その影響については、長期にわたる研究の成果は今のところ、出ていない。コールバーク(1968)は、『ピアジェの理論に基づいたアプローチは、こどもの知的発達を促進しないし、また遅れたこどもの発達に寄与し得ない』といっている。それより少し前にダックワース(Duckworth, 1964)は、『ピアジェの平衡化概念(equilibration concept)に基づいたこどもの学習操作したり、質問したり、比較したり、矛盾し

た事柄を一致させること―は、おそらくピアジェから教育者への送り物かも知れないが、このことは決して始めて耳にする言葉ではない。三〇年も前にジョン・デューイがいつていることの根幹であった』という。

「コーヘン (Cohen, 1966) は、ピアジェはモティベーションについてはほとんど触れていないと指摘し、これに共感してブルーナーも、ピアジェの理論は、児童や成年が努力してむかうさまざまなゴールについて説明していないといっている (1959)。ともあれ、複雑、不可解な人間の発達と学習について、現在の理論は十分に説明しきれない。だが幼児教育者が実際にカリキュラムをつくる時に、強調されるべきピアジェ理論の三つの事柄は、① 教材の内容とそれを与える時期の示唆になる、発達は連続しているという概念、② 教育的な環境において、子ども自ら動き発見する学習、③ 認知成長の質を高めるために、同年齢のグループとの社会的交流の強調、ということであろうと、フーパー (Hooper, 1970) はいつている」

第四章の言語発達に重点をおく教育についても、その批評の中から少しひろってみよう。

「明らかに、バライター・イングルマン (Bereiter-Engelmann) の詰め込み式方法は、従来の教育からすると突飛な試みである。B-Eプログラムのまとまった分析はまだあまり出ていないが、

書面でみる反応はさまざまであり、たいがい反論を呼びおこすものである。それらの多くは、このプログラムのかけがえのすばらしい目標よりも、その機械的なやり方にある。反対者は、このプログラムの理論は認知心理の学校とはちがうとみる発達心理学者に多いようである。彼らにとって、論理的身体的知識は、感覚運動を使った行動を通して、次第につくられるもので、単に言語教材によって構成され、深められていくのではない。

B-Eプログラムは、① 観察できるほどの困難をもつことのためのものであり、② それは時間的な制限を大きく考慮に入れている。つまりXという問題とYという時間的制約の中で、学業を成功させるのに最も効果的な方法Zが、B-Eプログラムということになる。そして、非難点としては、① 言語発達のみにはその理論的根拠がない、② プログラムの内容と与え方、③ 社会情緒性に欠ける、等があげられるだろう」最後の第八章は、今後の幼児教育における諸問題で、締めくくられている。

「前七章までで私たちは幼児教育の重要性を再認識したが、問題はその内容である。しかし、ではどんなプログラムが最もよいのかという質問はあまりに単純すぎる」と、著者はいう。「なぜなら答えは常に、その人のもっているゴールや子どもの性質や要求によって違ってくるからである。だから一度にすべ

ての人を満足せしめる答えはあり得ないのである」そこで著者は、具体的に幼児教育の目標と主要な論点—what, how, when, who, and where—に焦点をおいて文章を進める。

「まず幼児教育を考える場合我々は二つの大きな目標を考えなければならぬ。つまり、それは現目標と長期目標の二つである。後者の長期目標には、個々の子どもの力を最大限にのばすとか、自分で物事の判断ができるようになるとか、自主的で責任感のあることもとか、自己を尊重するとか、他人の権利や所有物を尊敬するなど、ひとつひとつあげると限りがない。が結局のところ、これらの根本は幼児期に形成されることでの行動にある。初期の経験が後の連続した発達にはかり知れない違いをもたらすということなのである。ここでその経験を与える環境—それは現目標と深いかわりをもってくるのであるが—が問題になってくる。クロンバック(Cronback, 1969)がいうには、環境については二通りの考え方がありという。ひとつは、こどもに常に最善の環境を保持する。もうひとつは、一定の期間のみ特別な環境を与え、その間に有効的な発達をとげさせたり、それまでの遅れをとりもどし、普通の環境でついでいけるようにするということである。もちろん後者は社会階層とも関連して来る。

スターツ(Stats, 1968)は幼児教育の内容を組み立て、分析

し、評価する基準として、次のように「こどもの基本的な行動範囲」を分けている。

①基礎的な言語

a 音韻または音韻の組合わせ—これらは単語や文章の構成要素となる。 b 模倣スピーチ反応—これは「読む」能力の基礎になる。 c 言葉—周囲の物を適当な名前と呼ぶ。 d 言葉による身体的行動のコントロール。 e 日常おとなとこどもの間でかわされる会話(言葉)の意味がわかる。 f 簡単な文章構成が文法的にわかる。 g 基本的な数が数えられる。

②注意

a 言葉の指示だけで、見たり、感じたりする感覚反応ができる。 b 物をその形や色などの特徴で識別できる。

③感覚運動能力

a 空間で身体のバランスがとれたり、身体を適当に動かせる。 b 目と手の調節ができる。 c 他人の行動を識別し、それを模倣することができる。

④モティベーション

ほめられたり、周囲の状況でモティベートされるのみならず、こども自身が作業を終えた時の成就感のように、自分で自分をモティベートできる。

スターツの「基本的な行動範囲」はあくまでこどもの行動を

分析する基準として使われるものである。しかしながら読者はこれに限らず、現在のところはもう少し他のものを考えてみて「もいだろう」と著者はいう。

「さてプログラムの最小限のゴールがきまると、次はwhatとhowの問題になってくる。whatは内容のことであり、howとはその方法である。whenは発達の順序の中でいつ適当な教育的経験をさせるかのことであり、whoはもちろん誰がそのプログラムをつくるかである。教師の役割というものは、そこでとられている教育方針によって違ってくる。whereはまた答えにくい問題であり、精神分析学者が幼児の早期の母親との分離を疑問としている以上、今日アメリカの母親がすぐにも幼いこどもの教育を家庭外に手放すとは考えられない。そうなるとクロンバツクのいうように、家庭外で一時的に特別な訓練をするより、常に最善の環境を保持することの方がより現実的でありそうだ」

「六〇年代に始まった幼児教育のルネッサンスは七〇年代も続くであろう。どこでとどまるかは誰も知らない。しかしながら、現在の幼児教育のひとつひとつが、今後専門家によって、より注意深く見守られる必要があるということはいうまでもない。ことに教育にたずさわる者が、自分たちの価値感がいかに行動にあらわれ、それがどのようにこどもの行動に影響を及ぼすか、注意深い自己分析をしてみるのには、教育倫理上の問題を解く第

一步となるであろう。またさまざまな幼児教育の発展の中でも重要なことは、彼らが教育思想の中で新しい見通し(vistas)を発展させていることである。もちろんこの新しい見通しは、簡単に手のとどくものではない。しかし、もし真実の発展がとげられるならば、それはすべてのこどもの福祉を願う両親や教師や研究者たちが一緒になって行なわれるものでなくてはならない」と、最後の章を結んでいる。

残りの章は、三章にヘッドスタート・プログラム、五章に行動分析、七章にイギリス幼年学校と、さまざまな問題について編成されている。付録には、しばしば使われる諸テストの簡単な説明、「スクール・レディネス」について、それに米国における幼児むけプログラムの名前と所在が三十二も掲載されている。数えきれないほどの幼児教育のプログラムの中から、それらの特殊性によって代表的なものを五つに分け(モンテソリー、ヘッドスタート、バイター・イングルマン、行動治療それにピアジェ)簡単な紹介と研究の実状を要領よくまとめているところに、この書物の価値があるように思う。しかし、幼児を対象とした細かい研究はいくらページ数を重ねてもきりがなくあるのに、現在の所は、今後の幼児教育の歩むべき道は誰にもわからないのである。読者はこの本が今日のアメリカ幼児教育界を簡単に把握するのに好都合な本であると認識すると同時

に、非常な勢いで、今まわり続けている車輪の中で、多くの研究者たちが一步も外へ出て休むひまのない現実を感じとらないわけにはいかない。

(十文字学園女子短期大学)



幼児の教育 第七十一巻 第七号

七月号 定価一〇〇円

昭和四十七年六月二十五日印刷
昭和四十七年七月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ二一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いいたします